

[評者]
藤本卓司
耳原総合病院救急総合診療
科部長



《ジェネラリスト BOOKS》
身体診察 免許皆伝
目的別フィジカルの取り方 伝授します
平島 修, 志水太郎, 和足孝之 編

●A5 頁248 2017年4月
定価：本体4,200円＋税
[ISBN978-4-260-03029-8]医学書院刊

新進気鋭の若い医師たちによる身体診察の本が発刊された。毎年、新年度が始まると感じるのだが、新卒の初期研修医たちはほぼ例外なく将来志望する専門領域にかかわらず身体診察の基本を正しく習得しておきたい、という気持ちを強く持っている。『身体診察 免許皆伝』は総合医、家庭医、救急医など、ジェネラルな方向に進む人たちのみならず、専門領域に進む若手医師たちにもぜひ手にとってほしい本である。本書の特徴は以下のとおりである。

第一に、カラーの写真や図が多く使われていて視覚的にたいへんわかりやすい。身体診察は自分の身体を動かして覚えるものであるから、基本形が沢山の画像で示されていることは読者にとってはありがたい。

二つ目として、バイタルサイン、視診、聴診、触診、打診の項目が順序立てて明確に分けて記載してある。例えば呼吸器疾患は聴診というように疾患によって診察の方法が偏りがちになるが、視診から打診まで全て漏らさず述べられている。

三つ目に、診察手技のちょっとしたコツや工夫が丁寧に書いてある。実際にベッドサイドで所見をとる際には、実際のコツや工夫をキーワード的な短い言葉を添えて教えてもらうことにより、急に視界が開けたような気持ちになることがある。これらのキーワードは本文中よりもむしろ写真や図の下にやや小さな文字として書かれている場合が多いので、読者はぜひ小さな

文字を読み飛ばさないようにしていただきたいと思う。

最後に、感度、特異度、陽性的中率、陰性的中率があまり書いていない点は、私個人としてはかえって好感を持って読むことができた。なぜなら、これらの数値は同じ疾患群を対象とした臨床研究であっても、さまざまな条件や定義の影響を受けて高くもなれば低くもなり、一概には言えない部分があるからである。疫学的な数値として知っておくことはもちろん大切であるが、実際に患者さんを目の前にしたときには、鑑別診断を頭に思い浮かべながら、この本で紹介されている重要所見をひとつひとつ探してみる姿勢が求められると思う。

さて、言い古された言葉かもしれないが、「教えることは学ぶこと」と言う。独りでコツコツと学ぶことももちろん大切だが、それに加えて、例えば指導医は研修医に、2年目研修医は1年目に、1年目研修医は医学生に「教えてみる」ことによって、知識と技術の理解が深まるし、効率よく自らに定着させることができる。もし本書に記されている何らかの身体診察の陽性所見に出合ったら、患者さんの同意を得た上で、ベッドサイド回診で誰かに教えてみてはどうだろうか。その際、手技を行う上でのコツや工夫について一言添えることを忘れずに試みていただきたいと思う。『身体診察 免許皆伝』はそのような互いに教え合うベッドサイド教育の契機を与えてくれる本である。